

観光社会学ゼミ卒業論文集

Vol. 2

2014（平成26）年度

琉球大学

観光産業科学部 観光科学科

観光社会学研究室

『観光社会学ゼミ卒業論文集』について

観光社会学ゼミ（琉球大学観光産業科学部観光科学科）は、観光地周辺の社会調査を基軸とし、地域振興のために観光が具体的に果たしうる役割や責務、およびそのための現実的課題について考究することを主たる目的として活動しています。

3年次ゼミは、全員で1グループとして調査します。調査地や調査事象の選定、調査の目的設定は、指導教員が指示するのではなく、ゼミ生が自ら議論を重ねて行います。さらに、実効的かつ実現可能な調査計画の策定はもちろん、調査対象者へのアポイント取りや挨拶に至るまで、すべてゼミ生が行います。換言すれば、社会調査の最初から最後までの一通りを、全員で協力しながら経験するわけです。指導教員は、議論にも調査にも常に同席し、適宜アドバイスや方向修正を行いますが、前面に立って主導することはありません。調査の結果は、年度末にポスターとしてまとめ、さらに観光景観学ゼミとの合同発表会にて報告しています。

これらに先駆け2年次ゼミ（後期のみ）では、上記の3年次ゼミ活動を有効に進めるため、座学ならびに現場視察を通じた基礎づくりを行っています。

4年次ゼミは、原則として個人単位で調査します。調査目的などには一切制限がなく、調査地も沖縄本島内に限りません。ただし、各人はまず調査計画書を作成し、指導教員に対してプレゼンすることを求められます。指導教員はこれに対し、調査の意義や実現可能性などの観点から審査を行います。この審査で合格せねば、調査に着手することは許されません。調査の結果に基づき、各人は年度末に卒業論文を執筆します。卒業論文は、様式に従い原則4～6ページにまとめることを条件としています。社会学の論文としては短いこの分量は、読者を意識して情報の取捨選択を厳密に行うこと、一言一句に責任を持ちながら自身の主張を精緻に立論することを重視し、これらの能力を涵養することを目的として設定しているものです。

卒業論文の審査は、授業としてのゼミの単位認定とは別個のものとして行います。すなわち、単位認定は各人の努力の仕方などプロセスを重視して行うのに対し、卒業論文審査は書き上げられたものの結果がすべてです。審査の結果、指導教員が合格を出した論文のみが、この『観光社会学ゼミ卒業論文集』に掲載されることを許されます。逆に言えば、単位認定を受けて卒業はできても、論文が本集に掲載されないケースもあり得るということです。

次ページ以降に掲載された論文は、すべてこの審査に合格した卒業論文です。観光社会学ゼミ活動は、この論集の発刊をもって終了となりますが、ゼミ生諸君にはこの経験を糧として、今後さらに飛躍を遂げていてもらいたいと思います。

琉球大学観光産業科学部観光科学科 観光社会学研究室
准教授 越智 正樹

観光社会学ゼミ卒業論文集 Vol. 2 目次

泉水施設の観光地化とムラの関わり方に関する課題の考察 ——南城市垣花樋川を事例として——	伊志嶺 百香	2
「観光まちづくり」における住民参加の実態と課題 ——豊見城市瀬長島の観光開発政策を事例に——	川村 泰明	7
農村民泊による地域活性化の現状と課題 ——沖縄県糸満市の取り組みを事例として——	上原 龍史	14
「観光地化とは一線を画した商店街」の持続的な活性化の在り方 ——栄町市場商店街を事例として——	吉田 和希	19
<hr/>		
要約集		24

要約集

泉水施設の観光地化とムラの関わり方に関する課題の考察

——南城市垣花樋川を事例として——

伊志嶺 百香

現在、上水道の整備によって泉水施設が徐々に使われなくなり放置されるケースが各地で増加している。その対策の1つとして行われているものに、泉を公園として整備する活動がある。本研究は沖縄県南城市玉城にある垣花樋川（かきのはなひーじゃー）を例として、公園整備と観光地化によってムラと泉の関係性がどのように変化しているかについて調査を行った。そして調査結果から抽出した課題の解決に向けて、垣花樋川の今後の在り方について考察した。

調査の結果、水を汲み上げ各家庭に送水する簡易水道が整備されて以降、ムラと泉の関係性は希薄化していることがわかった。一方で散策道が整備されることで観光客流入は増加している。また、ムラの住民が、行政の行う整備に関しては容認姿勢であるのに対して観光客流入には批判的な態度を示したことから、問題点は垣花樋川が誰でも利用可能な「オープンアクセス」であることにありと考えられる。

この問題を解決するためには、住民が資源管理の担い手であると認知できる「コモンズ」としての管理体制の再構築が必要となってくるだろう。それによって住民は垣花樋川が自分たちの手で管理されているという自覚と、樋川が「自分たちのもの」であるという感覚を持ち続けることができるのではないだろうか。

「観光まちづくり」における住民参加の実態と課題

——豊見城市 瀬長島の観光開発政策を事例に——

川村 泰明

現在、「観光まちづくり」という言葉は地域振興の分野で一般的になっている。また、その中では観光業に携わらない地域住民の発展も考えなければならないとされ、その際、合意形成や開発プロセスへの住民参加、観光業によって生じた利益の再配分などが重要な要素となると指摘されている。

本研究では沖縄県豊見城市の西海岸地域に位置する無人島である瀬長島を事例地とし、当該地域の歴史的背景の調査や有意選出による関係者3名へのインタビュー調査を通じて、上記の要素が現実にはどのように達成され得るかを検討した。

調査の結果、瀬長島の観光開発プロセスへの住民参加において行政は、瀬長区の自治会員をはじめとした地元住民を優先的に扱っていることがわかった。しかし戦前から現在までの島の変化に伴い地元住民と島との関わり方は変化しており、その関係は以前よりも希薄化している

と考えられる。島との関わりが希薄になってしまった住民の意見を行政が優先していることで、効果的な住民参加を達成できていないのではないだろうか。

地元住民が開発地域への関心を高めていくとともに、行政は開発地域にどのような人がどのような関わりを持っているかを深く把握し、幅広い住民参加を開発プロセスの早い段階で行うことで、より効果的な住民参加を実現できるのではないだろうか。

農村民泊による地域活性化の現状と課題

——沖縄県糸満市の取り組みを事例として——

上原 龍史

今日、農山村地域の地域活性化を目指す策としてグリーン・ツーリズム（以下 GT）の取り組みが日本各地で広くみられるようになった。本論は、GT の取り組みの 1 つである農村民泊を実践している沖縄県糸満市において、関係者へのインタビュー調査を行い、農村民泊事業の抱える問題点や現状を明らかにすることを試みる。

民間の NPO 法人により 2006 年から民泊の受入を始めた同市では、年々受入人数を増やし、2014 年には受入世帯 667 世帯、受入人数は 3448 人となっていて、今後も受入規模の拡大を図っている。その背景には、NPO 法人や同市観光協会などが受入に際する研修や安全指導、受入民家の意見を取り入れた規則の作成などを通して受入民家からの信頼を得ているという点があった。また、同市では前述の NPO 法人とは別の受入窓口による民泊の受入も行われるようになり、同時期の受入においては受入民家の確保が困難になっている側面がある。そのような状況では、郷土の価値再発見や誇りの醸成などの本来の民泊事業に期待される点をなおざりにしたままの受入民家確保や過密日程による受入の質の低下が懸念される。今後、同市の民泊事業が優良なモデルケースとして発展を遂げていくために再考すべき点として、現在民泊の受入を行っていない住民を巻き込んでいく工夫や、受入民家主体となるための受入規則や憲章といったものを受入民家自らの手によって遵守していくことといった点が必要となってくるだろう。

「観光地化とは一線を画した商店街」の持続的な活性化の在り方

——栄町市場商店街を事例として——

吉田 和希

近年商店街を取り巻く環境は、大型商業施設の進出や人口減少により厳しい状況が続く。一方、革新的な製品開発やサービスの創造で、地域活性化等に活躍する商店街も多く存在する。

この中で、「観光地化」により地域活性化を図った商店街とは対照的に、地域活性化に成功しながら「観光地化とは一線を画した商店街」も存在している。例えば、沖縄県那覇市にある栄町市場商店街がそうである。本論は、この栄町市場商店街を対象に、「観光地化とは一線を画した商店街」の持続的な活性化の在り方を検討した。

調査方法として、商店街に関わる立場の 5 人を有意選出し、インタビュー調査を行った。その結果、活性化の要因として、まず商店街利用者の多くは、常連客や親類といった比較的「なじみ」のある客であるという点、次に商店街振興組合や関係する団体が、若年層に「なじみ」を浸透させる取り組みを行っている点が挙げられることがわかった。一方その裏では、再開発問題、イベントの継続に関する市場の在り方、若年層への PR といった課題があることも分かった。この結果を受けて本論は、「観光地化とは一線を画した」活性化が実現している今こそ、これらの課題にアプローチするため、「組合による統一したビジョンの制定」「商店街と関係する各主体との連携の強化」といった方策に着手する必要があることを指摘する。

観光社会学ゼミ卒業論文集 Vol. 2

2015年2月5日発行

琉球大学観光産業科学部観光科学科
観光社会学研究室

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地

mochi@tm.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.tourism.u-ryukyu.ac.jp/semi/OST>
